

進行形に投影される含意構造と世界像

—「表象」と「アレンジメント」の言語ゲーム

久 部 和 彦

はじめに

英語に於ける進行形使用時の意味の外延と内包に関する考察は混乱を極めている。大抵は、ある種の「認識の持続の幅や伸縮」を発信者と受信者が「一致して」捉えているか否かを含めて「ケースごとの森羅万象にデペンドする」という「きまりの悪い」まとめ方で解説者たちは折り合いをつけている。「街の中の言語ゲーム」の実践として、進行形使用は今でも非常に多様化しており、「多様化の言語ゲームの総体」を記述することは容易ではない。教育現場での進行形指導では、「前後の<認識の持続>」を含む進行形使用については、かなり「あいまい」である。英語圏の一般的な英語に照らしても、心の中で一旦この先のイベント等についての「認識が形成された後」については、事象そのものの生起と持続に限らず心的な認識の持続を有する現在進行形の表現が許されており、この点についても、指導法により適切な用例の分類が求められている。「時の幅」や「進行性の有無」というものは心的理解の開始時や意識化の持続概念を起点とした進行状況と織りあわされているケースは多い。その捉え方については、更なる整理と脱構築が不可欠な課題であると言える。

進行形の伸縮性と幅を巡る認識

本稿での論述手法は、今回もこれまでと同様、安易な少数統計による単純な分類や理論化を注意深く避け、「後期ヴィトゲンシュタイン的」な「展望（記述に留め置く提示）」と「アフォリズム」が論じ方と書き方の基本になっている。《A Practical English Grammar》の中でトムソンとマーティネットは、「目の前の事象が画像認識レベルとしては動いていない」進行形のことについて、アクションやイベントが「まだ」開始されていない場合でも、使用可能な現在進行形はあると述べている。「実際のイベントの進行」と「並走」はしていないが「心の認識が開始された」のであり、それが継続して進む限り、現在進行中という「こと」が意味の核に「居残り続ける」という場合なども含まれる。こうした静かな心的進行の開始が包摂する「調整済の意識」の含意や、心理上の進行開始という「黙示の効力」を、教育する対象者に「意識的に」理解させ、その伸縮性を「例示を通して」学ばせることは、「文法の単純化」という教育傾向を訂正する手始めとなろう。まずは、「進行の開始」は黙示や含意でもよいという「起点問題の整理」を通じた意識転換を考えさせ、その後、進行が「前提」とされた会話環境が論理的に既に成立している場合には、その使用は、眼前する指示対象との「突合せ」のみを有する用法には限らないという指導が重要であろう。もっとも、差異の有無は、「持続」の「捉え方」が異なるのみで、「持続の意識」はどのような用法内にも存するという観点は保持させなければならない。また、持続は「首尾一貫した持続の意識」と「途切れない持続の状態」の二つのどちらをもカバーする概念で、どちらも「持続」であることに変わりはない。あるいは、進行形には、「進行が連続しない<途切れ>を含む進行形」、「進行を<現に>有する現在形」、「認識の<行き渡り>を条件に成立する進行開始前の進行形」等に分かれると言ってもよい。いずれにせよ、「進行」という概念フレームの多層性への意識化が、使用力の「幅」の形成に有用とみてよいであろう。「表情」の変化も「心的な進行開始の合図」となりうるが、「アレンジメント」の「形成完了のあと」での表情変化を、進行認識の起点と捉え、その後は「進行の継続性」が見え隠れする場合でも「進行は（中断があっても）存在する」と考えさせてよいのである。要は、会話の含意や論理の「中での」進行性保持に説明可能な「図式やマインド」があれば、「進行がある」という「文法基底が十分満たされうる」と教えるべきではなかろうか。

進行形の基底分類：表象・調整の介在型、信念・心的進行の型、可視継続の型

朝見た猫が表象（記憶表象：映像）として現れた場合、その後の発話で「朝の猫が記憶から取り出された」とは言わず「猫の姿がずっと離れない（続いている）」などと我々はしばしば「言う」。表象を介在した「進行形」がしばしば作られるのは、「繋げて」描写し「進行を演出」しているのであろうか？そうではなく「(自分の中に) 進行(継続)して存する」といいたいのであろうか？どちらでもなく「存しているから」表象が起きたとしか「考えられない」と言いたいのではないのか。ある種のカント的なこうした場合の「進行」とは、見解の表現手法を意識した用法というよりは「信念に裏打ちされた進行の存在の主張」なのである。すり合わせ（アレンジメント）なき表象に触発されて表現された進行形と、「調整し合意した後」の確認の際に表現される進行形は、それぞれ「別の」ものであろう。我々はしばしば「来るべき出来事」を予定しているとは言わず「そうなる途上にある」と「言う」のである。とりわけ、調整の成立の「その後」には、「そうなる (be going to)」という過程の「中にいる」ということを「言いたい」のである。そうした場合の用法には「心的理解」の「継続を言い立てたい状況」が「ある」との「思い」が含まれているのであり、必然性への信念や進行性の懐疑を挟めないケースの用法とは異なるのである。単純な動き以上のもの（信念等）を含めた表現法とみて間違いのないであろう。このように、進行形使用の基底やアスペクトは実に多様である。「眼前の動きのない進行意識」による進行形の使用では、進行がキャッシュになっていなくても構わないが、その場合には、進行の「断続性」や「思い」といった「意識の進行」が形成された時点を「進行の開始点」とみなしているのである。ほかに、以下のような用例もありうる。因果と進行性を織り合わせた使用例ともいえるが、例えば、「昨夜3時迄、猫も起きていたから、いま猫はまだ寝ている（睡眠の継続や進行）」という言い方などは、「猫は何らかの原因で」何かを「継続している」と「表現したいから」ではなく、「そうであるはずだ」という「疑いなき思い（信念）」が進行形を迷わず選択させているのである。しかし、本当のところは、猫は既に何度も朝から起きていたかもしれず、そうした可能性も否定できないが、この発話者が「見た瞬間」に猫が目を閉じていた場合などには、発話者は、昨夜の経緯と目を閉じて寝ている姿を「繋げて（進行形を使用し）」表現するのである。進行形にはヴィトゲンシュタインが『Zettel』のリマーク44番から50番で言及しているように、「途切れのある持続」や「本物の持続」を有するものとは別に、「状況が続いている」と認識した話者の「整合化」による表現を有している用法も多い。省みると、言語的操作の意識や意図が挟まれていない「信念による進行形使用」という「括り」では十分ではない例もかなりあることに気付くのである。とはいえ、「進行認識」に「躊躇」がない場合も含めて、「見方や信念を含む進行性」を有する用法は、結局のところ「理解構図を描いている」用法と言えるのではあるまいか。繰り返すが、「動き」だけが「進行形」の決め手ではないのである。猫が床から机の上にジャンプして乗ったという「動き」は進行形ではなく過去形で表現される。即ち「The cat jumped onto the desk」といった形である。進行形の使用は、理解構図の連続性への「意識を含んでいる」。「単なる動き以上」の「意図」や「因果形成意識・信念」といった「話し手の連続性への意識」に連なる文法基底があると言ってもよい。諸例は、複雑系の学問のように、今後も益々多層化し用法を拡張していくことであろう。英語の教育現場はこの文法基底の外延の広がりを意識的に勘案し、多層性を有した指導を織り込む必要があると思われる。

主要参考文献：

Cavell, S. *The Claim of Reason: Wittgenstein, Skepticism, Morality, and Tragedy* OUP
Malcolm, N. *Wittgenstein on Language and Rules* Philosophy Vol. 64, No. 247 (1989)
Thomson, A. J. & Martinet, A. V. *A Practical English Grammar* Oxford University Press
Wittgenstein, L. *Philosophical Investigations* Oxford: Basil Blackwell 他